

「三〇」熟語①三省

企業経営漫談士 岡野実空

『三々な経営』本編の補足や、皆さんから頂戴した質問への回答として書いたコラムは、前回で一区切り。続編「はじめに」の予告通り、ここから10回は「マネジメント」に関わる「三〇」の二字熟語を取り上げます。その初回は、お馴染みの「三省」。まずその「由来」と「意味」の確認に続き、それに関する我が「自省」です。

その1: 由来

『論語』学而第一にある、孔子晩年の弟子、曾子の言葉、「吾日三省吾身」から。もっとも大半の方は、出版社「三省堂」の社名の由来として知ったのではないかと思います。またその知名度の高さとは対照的に、ほとんどの方が答えられないその具体的な内容は、「人の為に謀りて忠ならざるか。朋友と交わりて信ならざるか。習わざるを伝えしか」。

今回これをシリーズの冒頭に置いたのは、セミナーを担当する私たち講師にとって、それが「日々三省」の核心を突いているからです。

その2: 意味

さて多くの方がその中身を忘れてるのは、初めてその原文に触れたのが、恐らく学生時代ゆえ？それはあまりにも当然過ぎ、自分には必要ないと思いがち。「当たり前のこと」を「当たり前に行う」ことの難しさ、大切さを思い知るの、一人前の社会人になった証だからです。また「三」が持つ「しばしば」や「いろいろ」という時間空間的な広がりまで、若年で理解できる方は例外であり、その場で自分用にアレンジして習慣化しない限り、「三省」の二文字しか記憶に残らないのは当然です。

さらに多くの社会人が「三省」しないで済むのは、日々「組織」の中で分業しているおかげ？そしてそれが時間的、あるいは空間的に長くなればなるほど、社会に対する「貢献」より、組織の「維持」が「目的」になりがちです。そのとき、曾子のいう「人」と「朋友」は、「上司」や身近な「仲間」となり、社会とのつながりはまったく意識されなくなります。いま国民の命を守るより、自分たちの都合を優先する各官庁は、決して他人事ではありません。

そんなことにならないよう、ドラッカーが考案したのが、「目標による管理」。それが本来の機能を取り戻すために、組織全体とその中の自分の「役割」に関する「三省」を日々の習慣にしましょう。

👉 コラム「三々な経営」

0-2 なぜ「3」なのか

3-4 企業人の「三多」

E-32 先達の遺訓② 畠山芳雄氏

その3: 自省

さてここからは、2017年2月のコラム開始から今日に至る、我が「三省文」です。実際、それ以前に書いたものといえば、ほとんどが企画書や報告書の類。いざコラムを始めてみると、それまでの誤解や理解の浅い部分を次々に発見し、担当セミナーの「習わざるを伝えし」に愕然。それを防止するための、「朋友と交わりて信なり」の不十分さを思い知り、そんな状態で、「人の為に謀りて忠ならず」を繰り返していたことを猛省した次第です。

そこで思い出したのが、フランシス・ベーコンの言葉、「読むことは人を豊かにし、話すことは人を機敏にし、書くことは人を確かにする」でした。因みにこの名言に初めて触れたのは、セミナーの講師として多忙な日々を送り始めた40代前半。当時は転職直後で、さまざまなセミナーへの対応に追われ、ネタの豊富さと質疑応答の的確さはばかりを追求していました。そして50代に入り、担当する階層がミドルの上層になるにつれ、次第に経営の要素ごとの深みを要求されるようになり、改めて書くことの重要性を痛感したのです。

そこで思い知ったのが、「読む・話す・書く」の三拍子揃った、JMA 故畠山芳雄氏の助言の的確さ。いまから約30年前、転職直後の面談の詳細はともかく、締めめの「とにかく『日記』だけつけてください」の一言は、忘れることができません。御意！

2021年5月17日 実空